

会津みどり地域水田農業推進協議会が第3回地域水田農業ビジョン大賞表彰式で審査委員会特別賞を受賞！！



平成19年8月2日(木)ホテルグランドパレスで開催された、第3回地域水田ビジョン大賞表彰において、会津みどり地域水田農業推進協議会が見事に審査員奨励賞を受賞した。

農林水産大臣賞には江刺水田農業協議会、全国農業協同組合中央会長賞には二丈町地域水田

農業推進協議会始め全国で8協議会と並んでの受賞となりました。

会津みどり地域水田農業推進協議会では、米を取り巻く環境変化に対応した米づくりの推進を通じ体質の強い持続的な水田農業の確立を目指し関係機関と連携して創意工夫しながら様々な取組みに対して全国的に評価されたものである。

その具体的な概要は集落営農の推進については「2階建て方式集落営農体制」を管内に構築するため、管内323全集落において「集落水田ビジョン」を策定している。一階部分である農用地利用改善団体も年度内で55集落が設置され農地の高度活用や生産体制への展開は図られている。

売れる米づくりへの取組みとしては会津地域の4JAとともにエコファーマーによる会津米ブランド「会津エコ米」への取組みと、契約栽培を基本とした特別栽培米や有機栽培米などの取組みを行っている。低コスト稻作への取組みとして直播栽培も積極的に実施している。転作面積の過半を占める麦・ソバ・大豆の生産振興には機械化銀行のシステムを活用した農作業の受委託を拡大している。

園芸作物の振興には産地作り交付金の活用と消費者の要望する環境に配慮したエコファーマーによる野菜や花など多様な農産物の生産拡大を実施、特に防虫ネット被服栽培によるキュウリ・サヤインゲンは「みどり物語」(商標登録)として有利販売に繋げている。などのビジョン策定と実践による創意工夫が今回の受賞の誉れに繋がったものである。



平成19年度  
水田農業産地づくり  
シンポジューム  
日時：平成19年8月27日(月)  
場所：パルセいいざか



講演：「水田農業改革と地域農業」～時間軸と空間軸を見据えて～  
東京大学名誉教授 今村奈良臣 氏

戦後の農地改革から現在までの農業・農村の変化を明確に捉え、農家数の減少と耕作放棄地の増加する今日の現状をJAや地域全体で知恵を絞って取り組む必要がある。地域によって多くの宝物が残っている、それを活かすためにもまた、チェンジをチャンスに変えている、全国の優良事例がある。知恵を使えば活力のある地域にいくらでも変わる。逆に知恵を使わなければ疲弊するのは加速度的に下がっていく。農地改革から60年経過する、水田の共同化はチャンスの第一歩であり、これを活用して将来のあるものに繋げていくことがたいせつである。全国にトップランナーを次々につくって行く必要がある。先日、第3回地域水田農業ビジョン大賞の受賞協議会の優れた事例が多くある、売れる米づくりのためのブランド化や大豆では加工メーカー等も加えた契約栽培で安定生産をめざしている。関係機関がワンフロア化し

農地のマッピングシステムの活用や特定農業団体にたいする経理処理に対する支援などその他多彩な実践例が全国には存在する。地域の豊富な人材が発展の核になる、生産者は自信を持って経営をしてもらいたい。



事例報告：

JA会津みどりでは行政区域を越えたJA管内の広域エリアでの地域水田農業ビジョンの実現のため、関係機関一体となった農業振興体制の構築をしている。特に売れる米づくりのためエコファーマーによる生産体制、所得差をなくすために独自の米づくり基金の活用をしている。



飯館村では中山間地域における産地づくり交付金の充実を始めとした、各種交付金等の活用を地域全体20集落で組み合わせ活用している。その結果、転作作物としてのプロッコリーとリンドウの生産拡大と市場評価の高い产地体制の整備がされている。



西郷村では耕畜連携による家畜飼料の増産対策としてWCSを導入。直播栽培を含め転作田を活用しての高品質の畜産飼料の安定供給体制が確立されている。



岩手県の農事組合法人・原体ファームでは集落で農事組合法人を立ち上げ、中山間地域直接支払制度を活用した機械・施設の整備とともに加工部門である米パンの作成をし年商8000万円を達成、さらに今後もち加工をも加え拡大が期待できる。